様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　5 月　11 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520026
研究課題名（和文）　生態学的哲学と環境存在論の展開

研究課題名（英文）　The development of ecological philosophy and environmental ontology

研究代表者
河野　哲也（KONO　TETSUYA）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：60384715

研究成果の概要：
本研究は、J・J・ギブソンの生態学的心理学に包含される認識論・存在論を哲学的に敷衍し、生態学的立場の哲学の確立を目指した。従来は知覚論・認識論に限定されていた生態学的立場を、以下の三つの分野で展開した。（1）生態学的心理学と環境存在論を結びつけ、身体と環境とダイナミズムを理論化した。（2）社会的・科学技術的な環境の媒介性の解明し、科学技術社会論に貢献した。（3）アフォーダンス理論を踏まえて生態学的道徳的実在論を提案した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	480,000	2,980,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・倫理学
キーワード：認知哲学、生態学的心理学、環境存在論、道徳実在論、科学技術論

１．研究開始当初の背景

ジェームズ・J・ギブソンの生態学的心理学は、知覚心理学の問題を超えて、哲学的に近代的な認識論と存在論の変更を迫るものである。心の哲学や認知哲学の分野においては、ギブソンの重要性は徐々に理解されつつあるが、しばしばその基礎概念については誤解されがちであり、矮小化された理解も散見された。さらに、生態学的心理学の持ちうるその存在論的含意や倫理的な応用の可能性と射程までは十分に理解されていなかった。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究では、ジェームズ・J・ギブソンの生態学的心理学に包含される認識論・存在論を哲学的に敷衍し、生態学的（エコロジカルな）立場の哲学の確立を目指した。

とくに、従来は知覚論・認識論に限定されていた生態学的リアリズムを、以下のよ

うな存在論や環境論、倫理学の分野へと拡張し、生態学的立場の哲学として、以下のように包括的に確立することを目指した。

（1）生態学的心理学と身体-環境の存在論：身体的主体と生態学的環境との交渉のダイナミズムの理論化。

（2）社会環境論・科学技術環境論：人間の心理と行動における社会的・科学技術的な環境（人間関係・技術・テクノロジー・制度）の媒介性の解明。

（3）道徳実在論と環境倫理学：アフォーダンス理論などの心理学的な観点を踏まえた、道徳的実在論の擁護。さらに環境倫理学的な課題についての考察。

３．研究の方法

研究は、基本的に文献の解釈とその総合を中心としながら、国内外の関連学会や自主シンポジウム、大学などが主催する講演会などに参加することで情報収集や意見交換を行い、さらに情報提供者による情報提供を受けるなどして遂行した。

４．研究成果

研究成果は、国内外の学会における個人発表、シンポジウムやワークショップ（提題、企画、指定討論など）、大学や公益団体、企業などが企画する講演会で発表し、学会雑誌、商業誌、著作（単著・共著）の形で文書として公開した。それ以外に、書評やエッセイ、座談会の記録などを通した派生的な成果発表を行った。

その結果、量的には、図書 10 件（単著 2 冊、共著 7 冊、翻訳 1 冊）、雑誌論文 7 件、学会発表 23 件、書評などその他の出版物 15 件となり、質量ともに最大限の成果を収められたものと自負している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7 件）

① 河野哲也 「拡張した心と脳科学」『大航海』(脳・意識・文明)(査読無)No.70, 2008 年 12 月, pp.84-91.

② 河野哲也 「知覚と生態学的環境の誕生：メルロ=ポンティの存在論が示唆するもの」『思想』（査読無）No.1015, 2008 年 11 月号, pp.165-182.

③ 河野哲也, 蘭千壽, 高橋知巳, 松野良一, 樽木靖夫, 山内圭子「大学生を対象とした組織倫理教育の効果（その２）：倫理教育プログラム実施後の個人の倫理意識の変容」 『日本経営倫理学会誌』（査読有） No.15 (2008/3), pp.203-212.

④ 河野哲也 「「新しい人間学」構築のための序論」『玉川大学紀要「論叢」』(査読有) No.47(2007/3), pp.91-102.

⑤ 河野哲也, 蘭千壽, 松野良一, 樽木靖夫, 高橋知巳, 山内圭子「大学生を対象とした組織倫理教育の効果」『日本経営倫理学会誌』（査読有） No.14 (2007/3), pp.29-39.

⑥ Kono,Tetsuya “Philosophical and ethical problems about man-machine system: A perspective from special needs education and welfare”, 『科学技術倫理研究』(査読無)Vol.3, Oct. 2006, 北海道大学創成科学共同研究機構（流動研究部門）石原研究室発行, pp.44-49.

⑦ Kono,Tetsuya “Redefining the temporal nature of experience”, *Proceedings of 2nd international conference of Phenomenology for East-Asian Circle*, Eds. Junichi Murata et al. （査読無） September 2006, pp.82-88.

〔学会発表〕（計 23 件）

① 河野哲也, 自主シンポジウム指定討論：「石田・三嶋提題への指定討論：自閉症スペクトラムの障害本質とその教育法に関する生態学的立場からの解釈」, 自主シンポジウム『認知科学への生態学的アプローチから発達障害自閉症の知覚情報処理認知システムを問い直す――環境との相補性欠如 増え続ける触れないこどもたち――』, 企画話題提供者: 石田暁,

司会指定討論者： 三嶋博之，指定討論者： 河野哲也，第 20 回日本発達心理学会，2009/3/23，於：日本女子大学，百 206 教室.

② Kono,Tetsuya，ワークショップ提題：“An Ontology for Perception”，*Philosophy of Perception: Being in the World,* 東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP) 主催ワークショップ，2009/3/7 於：東京大学駒場キャンパス 18 号館 4 階 コラボレーションルーム 3.

③ Kono,Tetsuya，指定講演：“Personality and Morality in Merleau-Ponty’s philosophy”，*Merleau-Ponty’s Phenomenology and the Future of Phenomenology to celebrate the 30th anniversary of the establishment of Korean Society for Phenomenology (KSP) and the centennial of Merleau-Ponty’s birth,* 2008/11/29, at Seoul National University in Seoul, South Korea.

④ Kono, Tetsuya，招待講義： “Depth perception and Embodied Memory: A Perspective from Merleau-Ponty and Ecological Psychology”，Lecture at Seoul National University in Seoul, South Korea, 2008/11/28.

⑤ Kono,Tetsuya，シンポジウム提題：“Hyoi (possession) and morality”，*Ver une nouvelle philosophie du corps: Centenaire de la naissance de Maurice Merleau-Ponty*, 2008/11/23, Ikebukuro campus, Rikkyo University.

⑥ Kono,Tetsuya，個人発表： “La neuroéthique et la psychologisation de la société japonaise”，*Autour du Corps Humain: Bioéthique comparée France-Japon*, 2008/9/4, à Centre George Canguilhem, Université Paris-Diderot, Paris, France.

⑦ Kono,Tetsuya，個人発表： “Qu’y a-t-il dans le cerveau? Philosophie du mental écologique”，Être vers la vie（生への存在），Colloque à Cerisy-la-Salle, 2008/8/26, Cerisy-la-Salle, France.

⑧ 河野哲也，シンポジウム提題：「環境・文学・変身：ギブソン心理学とロートレアモン伯爵」，シンポジウム『〈環境〉のなかの表象と心』，司会： 高橋龍夫・井上優，日本近代文学会 2008 年度春季大会，2008 /5/25，於： 東洋大学井上円了ホール.

⑨ 河野哲也，個人発表：「哲学から脳科学への問いかけ――拡張された心、規範、社会構成主義――」 玉川大学脳科学研究所 脳科学リテラシー部門 第３回研究会，2008/3/8，於：玉川大学研究管理棟.

⑩ 河野哲也，ワークショップ・オーガナイザー及び司会：「認知の神経科学的基礎に関する哲学的研究」提題者:蟹池陽一，中澤栄輔，原 塑，オーガナイザー:河野哲也，日本科学哲学会第 40 回大会，2007/11/11，於：中央大学（多摩キャンパス）.

⑪ 河野哲也，共同発表：「大学生を対象とした組織倫理教育の効果（その 2）：倫理教育プログラム実施後の個人の倫理意識の変容」共同発表者：河野哲也，蘭千壽，高橋知巳，松野良一，樽木靖夫，山内圭子，日本経営倫理学会第 15 回研究発表大会，2007/10/27，於： 慶応義塾大学（日吉キャンパス）.

⑫ Kono, Tetsuya, 個人発表： “The Embodied Memory: Ecological and phenomenological approach to time perception and memory”, *Interdisciplinary conference Cognition: Embodied, Embedded, Enactive, Extended.* Sunday, October 21, 2007, at University of Central Florida, Florida, US.

⑬ 河野哲也, シンポジウム・コメンテイター：「感性表現の英米文学―人間の感覚は何をとらえ、どう表現するか？」, 日本英文学会関東支部2007年7月例会, パネリスト：「古英語・中英語の場合」伊藤盡, 「ロマン派と神経表象」石塚久郎, 「19世紀～20世紀小説」大久保譲, アメリカ詩―渡部桃子, コメンテイター:「現象学、知覚心理学の立場から」河野哲也, 2007年7月21日（土）13：30～15：30, 於： 専修大学神田キャンパス302教室.

⑭ Kono, Tetsuya, 個人発表: “The Problem of Animality and psychology”, *International Society of Theoretical Psychology Conference Theoretical Psychology beyond borders.* Thursday, June 21, 2007, at York University, Toronto.

⑮ 河野哲也, シンポジウム提題：「私たちは他人と直接に向かい合えるのか」『第７４回公共哲学京都フォーラム』「自己と他者のあわい」, 2007年6月10日(日) 9時～10時30分, 於： リーガロイヤルホテル（大阪・中之島）.

⑯ 河野哲也, ワークショップ提題: 「心的内容の規範性と脳科学」『科学技術倫理セミナー⑧』, テーマ: 「発達神経科学研究の倫理」, 主催：北海道大学創成科学共同研究機構, 2007年3月5日（月）10時～12時, 於：北海道大学人文社会科学総合教育研究棟(W棟).

⑰ 河野哲也, シンポジウム指定討論： シンポジウム「赤ちゃんの脳、子どもの脳: 科学と育ちと学びの倫理」, コーディネータ:石原孝二・佐倉統・福士珠美, 指定討論者: 福永憲一）、河野哲也, 主催：JST/RISTEX「脳科学と社会」研究開発領域, 2007年3月4日（日）12:30～17:00, 於：北海道大学人文社会科学総合教育研究棟(W棟) W203教室.

⑱ Kono, Tetsuya, 個人発表： “Comment commencer une nouvelle anthropologie philosophique?”, *Une journée franco-japonaise sur la "philosophie des sciences et éthique"*, le 24 novembre 2006 à l’Institut d’Histoire et de Philosophie des Sciences et des Technique.

⑲ 河野哲也, シンポジウム企画・司会: シンポジウムⅠ「クオリアの問題： 脳科学と現象学」, 提題者： 茂木健一郎, 河村次郎, 谷口純子, 企画・司会: 河野哲也, 日本現象学会第28回研究大会, 2006/11/11, 於: 慶應義塾大学三田キャンパス.

⑳ 河野哲也, ワークシップ提題：「心はからだの外にある」『Ｊ．Ｊ．ギブソン流の「エコロジカル」な視点から心理学を再考する』, 企画者： 増田直衛, 境敦史, 日本心理学会第70回大会, 2006/11/5, 於： 福岡国際会議場.

㉑ 河野哲也, 蘭千壽, 松野良一, 樽木靖夫, 高橋知巳, 山内圭子共同研究発表： 「大学生を対象とした組織倫理教育の効果」日本経営倫理学会第14回研究発表大会, 2006/10/21, 於： 慶応義塾大学（日吉）.

㉒ Kono, Tetsuya, 個人発表： “Redefining

the temporal nature of experience”, *PEACE (Phenomenology for East Asian Circle) Conference in Tokyo*, Friday, September 22, 2006, at National Olympic Memorial Youth Center at Yoyogi, Tokyo.

㉓ 河野哲也, ワークショップ・コメンテイター: 「Irrgang 氏と石井氏へのコメント」北海道大学創成科学共同研究機構主催『科学技術倫理セミナー⑦』, テーマ:「ロボティクスの倫理/科学技術文化」, 発表者: Bernhard Irrgang “Ethical Action in Robotics” “Technology Transfer as a Cultural Transfer”, 2006 年 6 月 4 日（日）10：00〜13:30, 於：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W408 号室.

〔図書〕(計 10 件)

① 河野哲也『暴走する脳科学: 哲学・倫理学からの批判的検討』 光文社新書, 2008 年 11 月（212 頁）.

② P.バニスター他著『質的心理学研究法入門:リフレキシビティの視点』(共訳) 五十嵐靖博・河野哲也監訳, 田辺肇・金丸隆太共訳, 新曜社, 2008 年 9 月(260 頁).

③ 河野哲也・染谷昌義・齋藤暢人編著『環境のオントロジー』 春秋社, 2008 年 7 月, pp.239-266.

④ 村田純一編, 河野哲也他著『岩波講座 哲学』 第 5 巻（心/脳の哲学）, 岩波書店, 2008 年 5 月, pp.85-105.

⑤ 中山剛史・坂上雅道編, 河野哲也他著『脳科学と哲学の出会い: 脳・生命・心』 玉川大学出版部, 2008 年 1 月, pp.209-248.

⑥ 河野哲也『善悪は実在するか: アフォーダンスの倫理学』 講談社メチエ, 2007 年 10 月（204 頁）.

⑦ 前野隆司著, 河野哲也他対談『脳の中の「私」はなぜ見つからないのか？: ロボティックス研究者が見た脳と心の思想史』 技術評論社, 2007 年 9 月, pp.239-266.

⑧ 蘭千壽・河野哲也編著『組織不正の心理学』 慶應義塾大学出版会, 2007 年 7 月, 序章, 1 章, 5 章, 6 章執筆.

⑨ 村田純一編, 河野哲也他著『共生のための技術哲学: 「ユニバーサルデザイン」という思想』 UTCP 叢書第 2 巻, 未来社, 2006 年 12 月, pp.139-147.

⑩ 三井善止編著, 河野哲也他著『他者のロゴスとパトス』 玉川大学出版会, 2006 年 10 月, pp. 111-138.

〔その他〕

① 河野哲也, [記事]「脳科学者と人文学者が脳を語りあう」第 88 回公共哲学京都フォーラム, テーマ〈脳といのち(生命)とこころ（心）とわたくし（私)〉報告, 『公共的良識人』 2009 年 3 月 1 日号, pp.1-2

② 河野哲也, [エッセイ]「道徳と裁判員制：マルキ・ド・サドからの考察」『タスク・マンスリー』 No.399, 2009 年 3 月号, pp.8-13.

③ 河野哲也, [論文共訳] Gail Weiss 「障害と加齢の「正常な異常性」」 河野哲也・福士侑生訳, 『現代思想』2008 年 12 月臨時増刊（総特集 メルロ=ポンティ：身体論の深化と拡張）, pp.312-321.

④ 河野哲也, [論文共訳] Renaud Barbaras 「後期メルロ＝ポンティにおける運動性と現象性」 齋藤瞳・河野哲也・松葉祥一訳, 『現代思想』2008 年 12 月臨時増刊（総特集 メルロ=ポンティ：身体論の深化と拡張）, pp.142-155.

⑤ 河野哲也, [討議]「身体論の深化と拡

張：メルロ=ポンティのアクチュアリテ」『現代思想』2008 年 12 月臨時増刊（総特集 メルロ=ポンティ：身体論の深化と拡張），pp. 70-90.

⑥ 河野哲也，［インタビュー］「「こころ」は環境と共にある……「自分探し」という不毛を超えて」『談』（特集：〈共に在る〉哲学） 2007 年 81 号(2008/3/28)，pp. 63-83.

⑦ 河野哲也，［論説］「ビジネス倫理学への心理学的アプローチ」『愛知県経営者協会会報』 2008 年 3 月号，pp. 2-5.

⑧ 河野哲也，［事典項目執筆］『応用倫理学辞典』（編集代表：加藤尚武、丸善出版、2007 年 12 月）の「社会調査と被験者の同意」「心理学実験と被験者の同意」の項目の執筆.

⑨ 河野哲也，［エッセイ］「自然と身体」『本』2007 年 11 月号，pp. 29-31.

⑩ 河野哲也，［書評］「松永澄夫『音の経験：言葉はどのように可能となるのか』（東信堂）」 『フランス哲学･思想研究』 第 12 号（2007/8），pp. 203-205.

⑪ 河野哲也，［読書案内］「心の哲学･心の科学への 15 分ツアー」 『人文会ニュース』 99 号（2006/10），pp. 6-24.

⑫ 河野哲也，［資料（論文紹介）］「フランス生命倫理： いくつかの論文の紹介」『医療と倫理』（日本医学哲学・倫理学会 関東支部） 第 6 号（2006/9），pp. 78-85.

⑬ 河野哲也，［書評］「山口裕之『人間科学の哲学』（勁草書房）」 『フランス哲学･思想研究』 第 11 号，（2006/8），pp. 222-225.

⑭ 河野哲也，［シンポジウム報告］「シンポジウム「エピステモロジーの現代的展開」 まえがき」 『フランス哲学･思想研究』 第 11 号（2006/8），pp. 72-73.

⑮ 河野哲也，［論苑（座談）］「自分探しの落とし穴： 〈心〉は環境とともにある」『第三文明』 557 号 （2006 年 5 月号），pp. 34-36.

６．研究組織

(1)研究代表者

河野　哲也　（KONO　TETSUYA）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：60384715

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし